
魔法少女リリカルなのは 転生者の伝説

観月 衛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 転生者の伝説

【Nコード】

N1702BA

【作者名】

観月 衛

【あらすじ】

ゼルダの伝説の熱烈なファンで主人公のリンクに憧れ剣の修行を行っていた主人公がリリカルなのはの世界に転生する話です。

ブローグ

俺は今、見渡す限り白色が続く謎の場所にいる。

「ここはどこだ？」

確かさっきまで家で剣の修行を終えてゼルダの伝説スカイウオード
ソードをしていたはずなんだが。

おまけに女の人が土下座しているし。

とりあえず俺は女の人に話しかけることにした、が

「あの〜」

「ひいつー!」

「?」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
い……」

女の人はずーっと俺に土下座状態のまま謝り続けている。

どうしようか。

とりあえず落ち着かせてみよう。

「あの〜」「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
めんなさい……」

だめだこいつ錯乱してやがる……こうなったら

「いいかげんにしろ、このアマー……ッ……!!」

ドカンッ!!

「痛い!？」

とりあえず殴った。

「落ち着いたか？」

「はい取り乱してすいません。」

「でどこ何所？」

「ここは死後の世界です。」

「じゃあ死んだのか俺？」

「はい……驚かないですね。」

「まあ死因が気になるけど生きようが死んでいようがどうでもよかったし死ぬ前まで自分の存在意義を考えてたしな……で俺この後どうなるの？」

「今回の件は私のせいなので転生させます。」

「……だが断」 「拒否権はありません。」 「なんだと!？」

「転生の際に特典3つと転生先を選べます。どうしますか？」

「えゝ因みに転生先って何所？」

「魔法少女リリカルなのはの世界です。」

「………あゝ思い出した確か友人の伝説の青年Aが俺に進めてたな！軽く再放送見たけど。」

「誰ですか?!その伝説の青年Aって!？」

「ん?えつと簡単に言うとな冬のコミックマーケット二日目に現れるランニングシャツと短パンで冬コミに参加してる友人。一部ではもう噂になってるよ。」

注意リアルで存在してて作者の友人です。

「……まあいいでしょうそれより早く特典決めてください。」

「さて、ほかに転生者はいるのか？」

「はい、いますよ。」

「そんなじゃあ……よし決めた一つ目ゼルダの伝説シリーズで出てくる武器、能力、アイテム等を全部くれ。もちろん敵として出てきた奴の能力やギラヒムも俺がマスターだと認識させた上でくれよ。後消費アイテムは生産できるようにして冒険ポーチには、物が無制限で入るようにしてくれ。」

「わかりました。」

「二つ目俺の容姿をゼルダの伝説のリンクの黒髪、黒瞳のバージョンにしてくれ。」

「はいはい」

「そして最後だが・・・マスターソードとギラヒムになのはの世界で出てくる能力や魔法関連の無効化能力と転生者の特典の無効化能力を付属してくれ。」

「わかりました。ではそれで決定します。でもよかつたんですか？デバイスとか無いと空も飛ばないし転送もできませんよ？」

「????何言つてんの転送なら時のオカリナ使えばいいし空ならガノンドルフの力使えばいいじゃんか？」

「・・・そうでしたねでは、転生させますね。あつ時期は無印で10歳からスタートですから。家とかも用意しといて冒険ポーチに場所の書いた紙入れときますから。」

「ああ色々どうも。」

「では、転生させます第2の人生を楽しんでください。」

1話

どうもついさっき転生させられた自称リンク（偽）です。

現在の状況を把握すると現在夜で公園らしき場所で倒れていたようです。

なぜわかったのかと言うと地面で寝ていたようで背中がメツチャ痛いんです。

まあそんなことはさておき現在俺が持っている物を確認しようと思います。

服装ですか・・・シャドウリンクの服ですね・・・まあ黒髪に頼んだんでそれは良しとします。

それでは注文したものがあるかチェックします。

腰にある冒険ポーチの中身を見てみます。

・・・なんか底が見えないけど・・・リアル四次元ポケットか！まあ取りあえず手をつ込んで中身を確認しよう。

まずは・・・お！なんか剣の柄らしき物の感触が・・・おゝこれは・・・コキリの剣でした。

なんか実際見るとナイフみたいだな・・・気を取り直して他のアイテムを見よう・・・今度はパチンコが出てきた・・・なんか時オカの子供時代の装備品しか出てこないぞ！どうなってるんだ！その後もバクダン、ボムチュウ、空き瓶、ブーメラン等しか出てこなく諦めかけたところに時のオカリナが出てきた。しかもなんかメモが張ってあった。

「なにに・・・時の歌は時間戻しができたらもう神の領域なのであなたの年齢やゼルダシリーズの武器やアイテムの変更に変更しました。使用方法は作品を想像しながら時の歌を吹けば良いです。ワープの歌はあなたが場所を想像すればワープできます。マスターソードに関しては無制限で出せますが15歳以上にならないと使用できないので気おつけてください・・・なるほどじゃあ早速。」

早速出したアイテムをしまい時の歌を吹いた。シリーズは・・・マスター登録もしたいからスカイウォードソードを想像しながら吹いた。

くくくくく

吹き終わった。んくくくくこの音色は神だなくそんなことを思っているとゼルダ定番の青白い光が俺を包み込んだ。そして光が消えた後俺は大人リンクになっていた。

「おくでは早速持ち物確認を・・・」

最初に冒険ポーチから出てきたのは、ビートルでした。その後も入手した順にアイテムが出てきそしてついにあの剣が出てきました。

「・・・マスターソード・・・」

ゲームでもきれいな剣だと思っていたが実際に見ると本当に美しい剣だった。

神々しいオーラを放っている白銀刃は本当に俺を魅了させた。そしてマスターソードが光だし光が剣から飛び出しその光は一人の少女になった。

スカイウォードソードをプレイした人なら誰でもわかるだろう。

ファイだ。

だがここにいるファイは魔族長ギラヒムのように人間と見分けもつかない状態の普通の少女だった。

「マスター登録完了しました。おはようございます。マイマスターリンク。」

あっやっぱりそうなるんだ。まあ前世の名前なんてもういららないしな。

「正確には夜だからこんばんわだけどな。えっとファイでいいのか？」

「イエスマスター。私は神よりあなたに従うように使わされました。これからよろしく願います。」

「ああよろしく。ところでギラヒムは？」

「僕ならここにいますよ。」

声ができる方向に向くと魔族長ギラヒムが木に寄りかかっていた。

「君が新しいマスターか、あのいけ好かない小僧に似ているのが好かないがこれからよろしく頼むよマスター。」

あーやっぱり・・・まあ敵だったもんな・・・

「ギラヒムは魔剣的な物のままなのか？」

「ああ僕は元々魔王様の剣だからね。それにそのファイと違って闇関連の物の吸収能力も僕には備わっているよ。あの女神が付属した効果だけだね。」

へーそんな効果もつけてくれたんだあの女神的なもの。なんか最初に殴ったの謝つとけばよかったかな？

そんなことを考えていると二人が何かに気づき反応のあった方向を向いた。

「マスター 魔力反応と結界の発動を感知しました。この世界の原作開始の結界である確率87%です。」

「転生者の反応もあるようだよマスター どうするんだい。」

ああもう原作始まるんだ。

でも今はあんま知らない此処の地理とか見ておきたいし拠点の家も調べたいから・・・

「ファイ転生者の反応にダウジングができるようにしておいてくれ。今回は介入しない。」

「イエスマスター。」

「いいのかいマスター？ 邪魔な奴なら殺したいだけ。」

「いやいいそれに俺が戦いたいと思っているのは再放送で見たあのよくわからない化け物だからね。」

「それについてだけどそれ僕のおもちゃにしていいいかい？」

「ちょっと戦ってみてからなら好きにしていよ。あれなんかすぐ再生するらしいし。」

「感謝するよマスター。」

「それじゃあ行くか。」

「イエスマスター。」

そう言うとファイはマスターソードに戻り、ギラヒムは俺と共に歩き始めた。早速拠点となる家に行ってみるか。

2話

冒険ポーチに入っていたマップを見てまずは今後の拠点となる家に向かっていた自称リンクこと俺とギラヒムだが途中できれいな青い宝石を拾った。

「・・・何これ？」

なんか妙な力を感じるんだが

「これはジュエルシードだよマスター」

隣にいたギラヒムが答えマスターソード内のファイが出てきた

『マスタージュエルシードとは強力な魔力を秘めた結晶体です。願いをかなえる石と言われていますが実際はそこまでの力は無くある程度ゆがんだ形で願いをかなえるものです。』

「後は次元震を起こすものとして使われてるよ。」

「ふーん・・・二人とも詳しいけど何んで？」

『私たちはマスターの物になる前にある程度の情報を女神様からもらっています。』

「あゝなるほど。」

つまりこれはゼルダで言うところの陰りの鏡の破片や陰りの結晶石と同じようなものか・・・んこんなものが地球にあるってことは・・・

「もしかしてこれ原作に関係するもの？」

『イエスマスター、これは今行われている。のちにPT事件と呼ばれるものに深くかわってくるものです。』

マジかよ俺はただある程度情報集めたら再放送であつたようなモンスターだらけの世界行って戦いとか思ってただけなのに捨てよっかな？・・・ん待てよ

「これ集めてる原作の奴らって強いのか？顔覚えてないけど。」

「さーねこの時期だったら弱いんじゃないかな？転生者はわからないけど。」

「じゃあその転生者の实力を見るためにそれを利用するか。」

「ん？・・・あゝそうゆうことなかなか面白いじゃないかい。」

どうやらギラヒムには俺の考えていることが分かったようだ。

「じゃあギラヒムこいつ（ジュエルシード）を明日発動する魔物に変えて飛ばしてくれ。」

「お安い御用だよ。」

そう言うところギラヒムは指を鳴らし俺の手に在ったジュエルシードはどこかに消えた。

「ファイ、ジュエルシードのダウジングはできるか？」

『イエスマスター、ジュエルシードをダウジングの対象として登録します。』

さて魔物化したジュエルシードどう対処するか見せてもらうつよ転生者
それが終わったらジュエルシード集めでもするか・・・

3話

??? side

俺の名前は高橋秀一転生者だ。

俺の容姿は神の奴に頼んで銀髪オツドアイだ。

しかも転生した世界は魔法少女リリカルなのはの世界だ。

よしゃあ!!俺tueeeeeeeeができる上に俺のハーレムも夢じゃない!

なのは達とのフラグを立てまくって俺の王国を作ってやるぜ。

なんせ俺にはFateのエクスカリバーがあるんだからな!

「どうしたの秀一君？」

「いやちよつと考え事をね(ニコ)」

「そっそう(汗)(その笑顔止めて気持ち悪いよ)」

『二人ともジュエルシールドだ!』

「!!!行くぞなのは!」

「うん！」

よしここで敵をかつこよく倒してなのは俺の虜にしてやるぞ！

リンク side

『マスター転生者と主人公達が移動を開始しました。』

現在俺たちはジュエルシードの発動地点（神社）が見える位置にいる。

昨日は家に行つて色々確認し空き瓶にシャトーロマニーなどを補給して町の散策をした。

因みに今は子供状態でキーターのお面をつけています。

装備は金剛の剣、ミラーシールドです。

それにここに来るまでに4つほどジュエルシードを回収したほとんどダウジングって便利だね！

おっどうやら発動したジュエルシードが魔物になるようだ。

ジュエルシードは黒い炎に包まれ蜘蛛のような形をした魔物に変化した。

「ギリヒムあの形状から察するにあれって・・・」

「ああ時オカの最初のボスゴーマだよ。」

・・・やっぱりかまあでも相手の洞察力と力を見るにはこいつが一番かもな

「因みに倒し方とかは、変わってるのか？」

「ジュエルシード状態じゃないと封印できないようにしただけさ倒し方は時オカと同じさ。」

つまり目をパチンコなどのものでひるませたら剣で切るか・・・

『マスター彼女らが着いたようです。』

もう来たか。さてお手並み拝見といこうじゃないか・・・

秀一 side

俺は、今戸惑っている。

なぜなら原作ではこの神社では犬の化け物がでたはずだ。
なのに今俺たちの目も前にいるのは蜘蛛のような化け物だからだ。
原作ではこんな化け物は出なかったはずだ。

「ユーノ君これって。」

「原生生物を取り込んだんだ。でもこのまがましい姿は」

そうこの蜘蛛はただデカイ蜘蛛とゆうわけじゃない
たとえるならそう魔物だ。

「そんなの関係ねえただぶつた切るまでだ！」

そう言つて俺はエクスカリバーを化け物に近づき振り下ろした。

なのはside

私はバリアジャケットを展開した
今駿一君が蜘蛛のお化けに向かって剣を振り下ろしたの、でもその

剣は、弾かれて蜘蛛は全くの無傷
その上秀一君に襲いかかったの。

「つく！こいつ」

お化けの攻撃をうまく避けた秀一君そして再び剣を構えたの

「エクスカリバーー！！」

秀一君の必殺技が出たの

あたり一面が光に包まれたさすがにあのお化けもこれでお終いな

そして光が晴れたが、ゴーマは無傷のままその場にいた。

「つな！？」

「「そんな…」」

リンク side

「これは・・・ひどいな・・・」

「あんな力任せで僕が作ったゴーマが倒せるわけないだろう。」

転生者の戦いを見ていたが・・・ひどいものだった。
ただの力任せの攻撃、相手の弱点も理解しようとしな。力では勝てないよ。

「・・・せつかくだ今の僕の力の確認にでも行くか。せつかく作ったゴーマを倒すのは、惜しいけど。」

「行くのかい？なら僕は、ここでマスターの力を見せてもらおうよ。」

「ああ」

先ず勇者の弓を出しゴーマの目に向けて放ったのちガノンドルフの力を使い空を飛び俺は現地に向かった

なのはside

私は倒せないなら封印すればいいと思い封印を施しましたが、封印

できずどうすればいいか考えていました。

でもその時一本の矢がお化けの目玉に当たりお化けが苦しみだしたの。

そして次の瞬間目の前に狐のお面をかぶって後ろには剣と不気味な顔が書いてあるきれいな盾をもった黒い服をきた私より少し背の高い人が現れたの。

「君は?!」

ユーノ君が誰か問いただそうと聞いたけど、その人はユーノ君の話を無視してひるんだお化けの目を背中 of 剣で何回も切りつけた。

そのお化けはダメージを受けたように体が一瞬赤く光ったりしたそしてしばらく切り付けられたお化けは突然大きなうめき声を上げて蜘蛛みたいなお化けは形を維持できなくなったように体がぼろぼろ崩れだして消えた最後に残ったのはジュエルシードだけだった。

「・・・」

黒い服の人は、倒したのを確認したらウエストにあるポーチから青いきれいなオカリナを出して曲を弾き始めたの

くくくくく

（きれいな音色）

私は素直にそう思った

「君はいつたいなにものなんだ！」

ユ一ノ君が質問するけどその人は、いったんこちらを見ただけ無視してそのオカリナを吹き続けました。

「てめえ無視してんじゃねえ！」

やけをさしたのか秀一君が剣で切りつけようとしたけど

その瞬間にオカリナを吹き終えた狐のお面の人_が光だして光になって空に消えていったの

（あの子いつたいたい誰だったんだろう。）

3 話（後書き）

撤退した時の曲は光のプレリユードです。

ではまた

4話

リンク side

昨日はゴーマを倒した。はつきり言ってゴーマは楽勝だった。どうせなら突きしか効かないようにしてほしかった。

まーそんな話はさておき現在はジュエルシード集めとちよつとした資材集めをしている。

なぜ資材集めをしているかと言うといちいち次元を超えるためにボスの能力を使うのもあほらしく感じたので、時空石を利用した船を製造しようと考えたからです。

ファイに聞いたところ時空石は次元に干渉する能力に関しては管理局？とか言う組織の船の動力源と同じらしいので建造することにした。

デザインは、デイズ二ーのパイレーツからフライング・ダッチマン号にしようと思うアレが一番ゼルダの帆船に近いし、なんせかつこいいからさ、これからサルロボを大量生産して船を・・・おっとジュエルシードの反応が近くなってきた。

『マスター前方の木の根元にジュエルシードの反応があるようです。』

んーなんか結構見つけれられるなジュエルシード案外結構な数があるのか？

注意リンクは、A Sの断片的な内容しか知りません。

「っと見つけこれで「そのジュエルシードを渡してください」?」

なんか女の子の声がした。

声がある方を見るとそこには見るからに露出の多い服を着てマントを羽織り斧を持った少女がいた。

十人に聞いたら全員が美少女と答えるだろうがリンクは違うことを考えていた。

(目のやり場に困る)

まあ取り合えず話をしないと始まらないので取り合えず話そう。

「取り合えず一言言わせてくれ」

フェイトは警戒するが次の一言でひょうしぬけした

「その格好恥ずかしくないの?それと魔法少女に憧れるのは、そろそろ卒業しなさい」

「えっ?! ええつと・・・あのその」

「はあ、まあこの際この話は置いておいてジュエルシードってのは?」

取りえず知らないふりをする

「あっはい! 貴方が今拾ったその青い石です。それがどうしても必要なんです」

「ああこれか、でもなんで必要なんだい?」

「・・・」

「答えられないのか・・・なら俺の目を真っ直ぐ見てくれ」

「えっ? あっはい!」

フェイトはリンクを目を見た

（・・・迷いのない真っ直ぐな目をしてるなだかどこかに悲しさも感じるな・・・それに体力も低下してるな所々ムチか何かに叩かれた跡があるな・・・まあこの子な大丈夫だろ）

「うんもう良いよ。ほれ」

そう言つとリンクは、フェイトに向けてジュエルシードを投げた。

「えっ？はわあわああ」

フェイトは慌ててジュエルシードを受け取った。

「あっあのどうして？」

「ん？君が迷いのない真っ直ぐな目をしてたから」

「えっ たったそれだけで？」

「ああ人を見る目は腐ってないからな。君は、大丈夫だと判断出来た。」

「あっありがとう」

「おっとそうだ！これはサービスだ」

そう言ったリンクはシャトーロマニーの入ったビンを渡した。
あのこれは？

「困った時や疲れた時に飲みな。きっと役立つから」

「あの、ありがとうございます」

「それじゃな」

「あの名前！」

「ん？」

「名前教えて下さい。私はフェイト・テストロッサって言います」

「・・・リンクだ。機会があったらまた会おうテストロッサ」

「うん。ありがとう。リンク」

そしてリンクは、その場を後にした。

フエイトside

リンク・・・不思議な人だ。最近まで変な人からジュエルシード集めを手伝うと言われて正直うつとうしいかったし、その人の視線も気持ち悪かった。

でもリンクは、何も言わずジュエルシードをくれた上に、この牛乳もくれた。そして何より不快感を感じなかった。

「・・・また会えるかな？」

その時からだろうか私はリンクのことが頭から離れなくなってきた。
いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1702ba/>

魔法少女リリカルなのは 転生者の伝説

2012年1月14日17時15分発行